

令和 6 年 4 月 19 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00047

研究課題名（和文）玄奘の思想的変貌を基準とする唯識思想のインドと中国・日本の異質性の究明

研究課題名（英文）An Inquiry into Differences between India and China/Japan regarding Vijnaptimatravada Thought, Using Xuanzang's Philosophical Transformation as a Criterion

研究代表者

佐久間 秀範（SAKUMA, Hidenori）

筑波大学・人文社会系（名誉教授）・名誉教授

研究者番号：90225839

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：玄奘がインドに留学する以前のインド唯識思想は現存する梵語原典（＝蔵語訳）によって推定できる。その後玄奘留学当時までに新たに展開していた思想は、中国に帰国当初の玄奘訳『撰大乘論無性積』に見られる。それは玄奘訳が蔵訳に存在しない思想を加えている部分に見いだすことができる。その後の玄奘訳『仏地経論』もまた蔵語訳『仏地経論』に存在しない多くの思想が加えられ、しかも玄奘訳『撰大乘論無性積』で提示した思想内容を玄奘自身が修正している。さらに修正した内容は後の唯識法相教学の正当説へと発展している。翻訳の時系列順に玄奘自身が思想的な変貌を遂げた点と見られ点をかなりの精度で明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来中国唯識教学と日本法相教学の内容はインド唯識思想と同等と信じられ、唯識法相教学を遡る形でインド唯識思想が理解されてきた。ところが両者に思想的な開きがあることが近年解ってきた。その変化の中心にいるのが玄奘であることを実証的に研究することはまれであった。本研究によってインドと中国・日本の異質性を生んだのが玄奘自身の思想的変貌であることの解明できたことは学術的意義がある。さらにはインドの考え方や中国および日本の考え方の違いも、玄奘の思想的変貌を見ることで感じ取れるようになったことには社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Indian Vijnaptimatravada thought prior to Xuanzang's visit to India can be inferred from extant Sanskrit texts (and their Tibetan translations). Further new developments up until Xuanzang's visit can be seen in his translation of Asvabhava's commentary on the Mahayanasamgraha, translated soon after his return to China. These developments can be found in sections where Xuanzang added ideas not found in the Tibetan translation. In his subsequent translation of the Buddhahumisastra there were also added many ideas not found in the Tibetan translation, and he modified some of the ideas presented in his earlier translation of Asvabhava's commentary on the Mahayana¬samgraha. Furthermore, these modified ideas developed into the orthodox views of subsequent Faxiang doctrine. It has been possible to clarify with considerable precision through Xuanzang's translations how his thinking changed over time.

研究分野：インド学仏教学

キーワード：玄奘 インド唯識思想 中国唯識教学 日本法相教学

1. 研究開始当初の背景

瑜伽行唯識思想を紐解くとき、祖師が弥勒であり、無著が継ぎ、世親が完成させ、それを陳那 - 無性 - 護法 - 戒賢 - 法称と繋ぐナーランダール系統と徳慧 - 安慧のヴァラビーの系統があると理解されてきている。玄奘はナーランダールから護法 (Dharmapāla) の説を中国にもたらし、この「護法の説」を中国唯識教学の正当説としたと考えられている。代表的な説は例えば**五性各別**、**四分説**であり、「アーラヤ識が転じて大円鏡智になる」という**転識得智**などである。ところが現存する梵本原典およびその忠実な翻訳と信じられてきた蔵訳文献と玄奘による漢訳文献を比較検討すると、これら上記代表説はほとんどがインドに遡れないことが明確になってきた。伝承では玄奘がインドで師事したとされる戒賢 (Śīlabhadra) の師は護法である。上記代表説を含めた中国唯識教学・日本法相教学の唱える説を「護法説」と呼ぶならば、この護法説はインドには遡れない。それを立証するために本研究ではまず概要に記した三つの文献を選び、漢訳の翻訳順序に従って梵本原典・蔵訳文献と漢訳文献とを比較考察することにした。その考察によって玄奘の思想とインドにおける思想との差異を明確にし、それらの差異が玄奘の翻訳年代を追うごとに変化し、次第に中国唯識教学・日本法相教学の正当説に結実したプロセスを明らかにしてゆく。ここで「**玄奘の思想**」という場合、玄奘自身の意図だけでなく、思想の変貌に影響を与えた翻訳場の人々の意図も含んでいる。

この発想を支える学術的背景の内、上記にあげた代表説について述べると次のようになる。

まず**五性各別**は玄奘訳『仏地経論』のみに現れ、玄奘の師戒賢造蔵訳『仏地経論』には全く現れない。五性各別が問題となるのは玄奘の弟子窺基 (= 基) などの門下生やこれを批判的に扱う天台教学においてである。インドではこの思想は明確ではない以上、玄奘の創作と言わざるを得ないのである。蔵訳のみ現存する『大乘莊嚴経論』安慧釈に上記の代表説が説かれている事実については、玄奘の弟子円測著『解深密経疏』が蔵訳された後に安慧釈が蔵訳されているから、蔵訳者が上記代表説を知った上で梵本原典にない代表説を加えて翻訳した可能性があることを踏まえて再検討する必要があるが出てくる。

「安難陳護一三四」と言い習わされる**四分説**もインドにはない。あるのは陳那 (Dignāga) が自証分 (svasaṃvedana) を世親以降に新たに加えた事実のみである。護法説はこれに証自証分を加えて四分説を唱えたとするが、証自証分は玄奘訳『仏地経論』以降の玄奘および玄奘門下の著作においてである。インドには存在しない。

さらに**転識得智**の完成した結合関係は現存する梵本原典には存在しない。蔵訳『大乘莊嚴経論』安慧釈にあることについては前述と同様である。アーラヤ識 - 大円鏡智および染汚意 (マナス; 後の末那識、第七識) - 平等性智の結びつきがようやく蔵訳の戒賢造『仏地経論』に現れるが、完成形はまだ見られない。玄奘訳『撰大乘論』無性釈には法相教学の護法説と異なる結合関係が示されるが蔵訳『撰大乘論』には無い。それを玄奘訳『仏地経論』は前訳『撰大乘論』無性釈の結合関係を翻して護法説に変えてしまっ

たのである。それが『成唯識論』に引き継がれ、護法説になってしまったのである。つまり戒賢の師護法がこの説を唱えることは不可能である。

上記の代表説を見ただけでも、これまで信じられて来たインド瑜伽行唯識学派の諸論師の系譜も含めて玄奘の報告が疑わしいことが判る。本研究の開始時点で前提となっていた内容を基に進めた中で予想していた成果を得られただけでなく、特にヴァラビーの安慧の思想が如来蔵思想をベースにした思想で、真諦が継いだという従来学界で信じられてきた図式はかなり後代になってから仕立て上げられたことも本研究で明確になった。以上の内容を背景として研究を開始した。

2. 研究の目的

護法説を正当説とする学界での考え方を牽引してきた一端は玄奘の『大唐西域記』にある。イギリスの考古学者アレクサンダー・カニンガム(1814-1893)が釈迦牟尼ブツダの覚りの地ブツダガヤのマハーボーディ寺(修復完成:1882)を始めとする発掘を成功させた基礎となるのが『大唐西域記』であったことがこの文献の信頼度を高度に高めたことは否めない。玄奘の報告が正確なものと認定され、『大唐西域記』のフランス語訳(1857-58)、英訳(1884)の翻訳順に情報が加味され、その後の考察の基礎となったことが判る。これは重大なことである。すでに代表者はヴァラビーの銅板碑文に登場する Sthiramati が諸註釈書を著した安慧(Sthiramati)とは別人であることを突き止めている。玄奘は『大唐西域記』でヴァラビーの Sthiramati を「堅慧」とし「安慧」としなかったものを、窺基が「安慧」として唯識教学に取り込んだことも判っている。『大唐西域記』は実際に玄奘が現地を訪れて記した部分とヴァラビーなど西インドのように現地を訪れたとは言いがたい記述の仕方とがある。さらにオリッサやナーガールジュナコンダ、アマラバティなど東インドにしても現在の現地の様子と符合するところがあり、玄奘が現地を訪れたことは確認できる。

ここで、この地方に玄奘がいた頃かなり盛んになっていたはずの密教については触れていないと本研究開始時点では考えていたが、本研究を進めるにしたがって、現代の仏教学で純粹密教と言いつわされる『大日経』や『金剛頂経』の成立以前に玄奘はインドに滞在していたわけであるので、玄奘が触れた密教が純粹密教以前のものであり、複数の密教経典を翻訳していることから、当時の密教を中国に伝えていたことが明確になった。さらに玄奘訳『大般若経』所収の「般若理趣品」は後の不空訳『金剛頂経』に至るまでの数種類の漢訳と同系統であることを鑑みると、玄奘が説一切有部から瑜伽行唯識思想の流れの中で思想史を組み立て、純粹密教経典の完成以前の密教を正確に把握していたことが分かった。

またこれまで知られてきた漢訳『大乘莊嚴経論』と梵本原典との差異に見られる点が『撰大乘論』無性釈の蔵訳と漢訳の差になっていることは判っている。これを精査することで玄奘が如何なる意図の下に翻訳活動を行い、どのように自分の思想を記し始めたかを明確にしてゆくことができる。こうした研究の方向性は、玄奘が梵本原典に忠実に

翻訳したとする常識を覆す全く新しい視点である。玄奘のインドから帰国直後の思想が『仏地経論』で大きく翻される部分を抽出することで玄奘の思想の変貌の基軸を列挙し提示する。その上で玄奘訳『撰大乘論』無性釈の思想内容が『成唯識論』の思想内容へと変貌する過程を明示する。これを基準としてインド瑜伽行唯識思想と中国唯識教学・日本法相教学の独自性を究明する。これは従来の唯識思想の理解を一度清算して、インドと中国・日本とを別な基準で再評価するものであり、これまでに無い**学術的独自性を持つ**ものである。

これらが本研究によって明確化したことにより、中国唯識教学・日本法相教学はインドで作られた思想ではなく中国という土壌の中で創り出された新たな教学であることが判った。つまり、インド瑜伽行唯識思想がヨーガの修行者の視点をもって理解すべき内容であるのにたいし、中国唯識教学がアビダルマ説一切有部の体系を復活させ、さらに中国という文化圏において新たに創造された価値観であることを再評価することができるようになった。

中国唯識教学はその後の中国仏教、例えば天台教学、華嚴教学に大きな影響を与え、さらには禅宗を生み出す基礎となっていることは否めない事実である。つまり中国的な修行実践の基礎でもある。中国では天台教学等中国的仏教に中国唯識教学は取って代わられて消滅してしまうが、その思想は日本法相教学として今日まで脈々と受け継がれ、明治期になると中国に逆輸入され、現在中国で法相教学を基礎にして唯識思想が再興されている。

本研究は以上のような内容を究明することを目的として進めたものである。その目的はかなりの程度達成されたものと確信している。

3. 研究の方法

代表者は瑜伽行唯識思想を学びはじめた当初に法相教学の示す内容が瑜伽行という実践とは距離があると感じ、また実践的な密教の中で多くの唯識思想のタームが使われていることに疑問を持った。インド瑜伽行派の現存する梵本を丹念に漢訳文献と比較して研究する内にインドと中国・日本の唯識思想には大きな相違がある事に気づきはじめた。そして従来のインド瑜伽行唯識思想の理解が玄奘に発する中国・日本の唯識思想を基準に行われたことに気づいた。弥勒・無著・世親など瑜伽行派諸論師の系譜も文献の内容と合わないことも次第に判るようになった。そして系譜など歴史的推移が玄奘の『大唐西域記』に大きく依存していることも判り、ブッダガヤなどの発掘によって高められた史実としての信頼性が仇となり、漢訳者玄奘の意図を見逃した可能性に思い至った。つまり修行実践を基礎とするインド唯識思想を、玄奘は説一切有部の思想体系を基軸として玄奘流に報告したと思われるのである。そこで諸註釈を合わせて漢訳した『仏地経論』を玄奘の師戒賢造蔵訳『仏地経論』と比較すると驚くほど中国・日本の唯識教学の護法説が蔵訳に欠けていることが判った。この文献以前の玄奘訳『撰大乘論』無性釈にすでに蔵訳との相違がある。しかしそこに示された思想内容は護法説とは異なるこ

とも判った。つまり瑜伽行派梵本原典は護法説と異なることが明確になった。そこでまず『大唐西域記』の示す内容を、中央アジアや西インドおよび東インドの現地調査と梵本原典の思想内容を総合して見ると、玄奘がインドの思想の流れの中から上記の流れを選び取って仏教史を描き、その玄奘の意図のもとに中国で翻訳を進める中で、さらに中国の思想風土と戦いながらもインドとは異なる護法説を生み出したのではないかという確信に思いに至った。

本研究の目的達成のために採った方法論は、一つにはこれまでのインドの現地調査によって、玄奘がインドで実際にその場所を訪れて学び取ったものと、現地には行かずに豊富な情報収集によって学び取ったものとを峻別し、二つ目には『仏地経論』の玄奘訳とチベット語訳とを丹念に比較検討し、『成唯識論』および唯識法相教学の内容との比較をすることにより、玄奘がインド唯識思想に何を加え、それをどのように変更したかを浮き彫りにするという方法を採用した。

4. 研究成果

玄奘が報告した『大唐西域記』の記述を現在のインド現地の状況と考えあわせるために、これまでに代表者はインドの現地調査を行ってきた。その過程において東インドには実際に訪れたことがはっきりした。それに対して中央インド、そして特に西インドに足跡を残したと考えることが難しいこともはっきりした。その成果は、2021年12月に発表した「旅する玄奘の思想的変遷」(佐久間秀範・近本謙介・本井牧子編『玄奘三蔵新たなる玄奘像をもとめて』所収)で明らかにした。

その後従来の唯識法相教学の常識とされてきた様々な理論を見直す内容を2023年9月に公刊した佐久間秀範著『修行者達の唯識思想』の第七章「瑜伽行唯識学派の諸論師の系譜」で明確にした。

本研究の一連の成果として、西インドのヴァラビーで発見された銅板碑文に Sthiramati という僧の名前があることから、従来の仏教学界でこの Sthiramati が世親の多くの論書に註釈を書いた Sthiramati と同一視されてきたが、これが別人であることを始め、五姓各別思想が玄奘の『仏地経論』に由来すること、安難陳護一三四という考え方が唯識法相教学独自の思想であることを明確にした。特に安難陳護一三四では陳那が相分・見分・自証分の三分説を唱えたことはインド原典に遡れるが、唯識法相教学の正当説を唱えた護法がこれに証自証分を加えた四分説を唱えたことになっているものの、これは玄奘訳『仏地経論』以前には遡れず、さらにインド原典にも見当たらない上に、護法の後継者と伝わる戒賢造チベット語訳『仏地経論』にも一切述べられていないことに鑑みて、師資相承関係からも時系列からも難しいということを明らかにした。さらにヴァラビーの Sthiramati を安慧として、その後継者が真諦であり、さらに玄奘の愛弟子円測へとつながり、これらが如来蔵思想としての唯識解釈であって、ナーランダールの護法、戒賢、玄奘の系統の正統な唯識法相教学と対立するものだという考え方が、特に日本の江戸時代に起因した妄想であることも明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 48
2. 論文標題 The Possibility of Collaborative Research between Representation-only Thought and Mindfulness	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学・思想論集	6. 最初と最後の頁 107-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 7
2. 論文標題 關於中国唯識教学和日本法相教学瑜伽行派論師的伝承的若干疑惑	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 唯識研究	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 0
2. 論文標題 唯識思想の成立と展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本佛教学会編『仏教事典』	6. 最初と最後の頁 244-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 0
2. 論文標題 旅する玄奘の思想的変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐久間秀範・近本謙介・本井牧子編『玄奘三蔵 新たなる玄奘像をもとめて』	6. 最初と最後の頁 31-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 27
2. 論文標題 ヨーガ行唯識思想からみるマインドフルネス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『鶴見大学佛教文化研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakuma, Hidenori	4. 巻 47
2. 論文標題 Two Trends in Yogacara-Vijnanavada Texts: An Approach from the Perspective of the Practitioner	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『哲学・思想論集』	6. 最初と最後の頁 39-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 52
2. 論文標題 ヨーガ行派から仏教論理学および密教へ - 修行者の視点からのアプローチ -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 密教学研究	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakuma, Hidenori	4. 巻 36
2. 論文標題 Was There Really Only One Commentator Named Sthiramati?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Sambhāsa	6. 最初と最後の頁 91-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 0
2. 論文標題 瞑想修行と計測の可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 仏典とマインドフルネス 負の反応とその対処法	6. 最初と最後の頁 94-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 54
2. 論文標題 修行者達の転依思想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 駒澤大学佛教学部論集	6. 最初と最後の頁 417-448
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 66
2. 論文標題 namanとpadaとvyanjanaと声と字と実相	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 豊山学報	6. 最初と最後の頁 709-730
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 修行者達の転依思想
3. 学会等名 駒澤大学令和4年度第一回公開講演会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 瞑想修行の文献データと計測データとのコラボレーションの可能性
3. 学会等名 日本仏教心理学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 ヨーガ行唯識思想からみるマインドフルネス 言葉は心を支配する
3. 学会等名 2021年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム「マインドフルネス研究最前線 禅および止観との関連」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 玄奘三蔵の築き上げた唯識の教義と実践、そしてその日本的展開
3. 学会等名 国際東方学会議
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 玄奘三蔵の漢訳教典から見るインド唯識と中国唯識
3. 学会等名 国際東方学会議
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 唯識と認識世界と物質世界
3. 学会等名 仏教サロン京都（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 旅する玄奘三蔵
3. 学会等名 アジア宗教研究会（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐久間秀範	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 384
3. 書名 修行者達の唯識思想	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関